

らびく サロン

らびくサロンとは、毎回テーマを設け、ボランティア・市民活動、生涯学習に取り組む人々を中心に集り、広げられる座談会です。

テーマ「大学のボランティア科目の広がり」と学生の「変化」

とき・平成15年(2003年)6月14日(土)／ところ・まちづくり市民交流プラザ2Fフリースペース
ゲスト／広島大学総合科学部助教授 日下部眞一さん

広島国際学院大学現代社会学部 大学院現代社会学科研究科 講師 眞鍋知子さん
環境を考える市民サークル宇宙船地球号の会代表 竹本伸さん
財団法人マツダ財団 事務局長代理 永松貴文さん



日下部眞一さん
広島大学 総合科学部 助教授

最近、ボランティア活動やNPOに関する科目を開設する大学が増えています。社会と接する機会が少くない学生にとって、ボランティア活動などを通して実学的な試みはどのような成果をもたらしているのでしょうか。中には、授業をきっかけとして、積極的にボランティア活動に参加するようになった学生も……。

きつかけはさまざま

大学でのボランティアの講義にかかわられている皆さんですが、そのきつかけを教えてください。

日下部 平成7年(1995年)の阪神淡路大震災の時、全国的にボランティアへの関心が高まりましたが、その時、広島大学の中でもボランティアについて学ぶ機会をつくるべきではないかという声が上がりました。そこで、私が「現代ボランティア論」を開講しました。広

島の大学では、初めての試みだったと思います。

竹本 宇宙船地球号の会は平成元年(1989年)から活動をスタートしたのですが、大学で講義をさせていただくようになったのは、5年前からです。最初は比治山大学柿本因子先生の「ボランティアワーク」講座、その後、日下部先生の「現代ボランティア論」の講師にも呼んでいただいています。

永松 マツダ財団は、マツダという企業が持っている人材やノウハウ、ネットワークを地域貢献事業や次世代の育成に生かそうという社会的な使命を持って、昭和59年(1984年)に誕生しました。寄付講義は、次世代の育成に寄与するという目的で平成6年(1994年)から始めました。最初の年は、広島国際学院大学に「国際協力ボランティア活動」という講義を、その後、広島工業大学や県立広島女子大学、安田女子短期大学へと広がっています。

眞鍋 私はこの4月に、「ボランティアとNPOの社会学」という講座を立ち上げたばかりです。昨年まで担当していた「生活構造論」で学生の生活を調べてみた



竹本伸さん
環境を考える市民サークル
宇宙船地球号の会 代表

参加する学生の意識

—— 実際、講義

をしてみての感想はどうですか？

眞鍋 受講者は8名でしたが、みんな熱心な学生ばかり。今年のとうかさんのおみ拾いに参加した人もいますし、まちづくりに関心がある学生もいます。30時間の活動・実習があります。30時間の活動・実習があります。30時間の活動・実習があります。

竹本 われわれの活動の一つである



「これもエコクラブ」という小学生を対象とした環境学習活動のボランティアに参加する大学生については、活動前に集まってもらったレクチャーします。このレクチャーがあるかないかで、学生たちの意識が変わってきます。ボランティアは「やってあげる」のではない、ということを知ってもらいたい。講師の役目。「二つの活動をするためには裏方の人がたくさんいて、その人たちに支えられている」ということを忘れちゃいけない」といつも話しています。次の年に、講義とは関係なく、やりたいとまた来てくれる学生も何人かいるんですよ。

日下部 講座をつくった当初の3、4年くらいは、講師と学生が講義後に話し、ネットワークができるということが結構あったんですが、今は、学生の空気が変わったと思います。講義がテレビ画面のようなものになってしまっている。私の講座に、活動現場での実習がないからかもしれません。

永松 寄付講義は、単位互換でオープンに行っている授業ですから、いろいろな大学から学生が集まります。実際にボランティアをやりたい人、知識をもっと深めて現在の活動に役立てたい人など、割と積極的に参加してくれそうです。

大学と社会のボランティアに対する姿勢

学生によって、かなり温度差があるようですね。

日下部 それは、選択科目か必修科目かの違いでしょうね。私の場合は総合科目の一つということもあり、半強制的なので、テレビを見ているようになっちゃうわけですね。ボランティア教育を大学はいかに取り組むべきなのか、市民教育の中でどのように位置づけるのかということが、まず大切ですね。

永松 NPO講座などを考える場合、学問的に行うことは必要だと思います。



眞鍋知子さん
広島国際学院大学 現代社会学部
大学院現代社会学科研究科 講師